

すべて体あたり眩しく

河野裕子さんを悼む

道浦 母都子
歌人



河野裕子さん

河野裕子さんが亡くなった。仕事先に向かうモノレールの駅で、携帯電話で知らせを聞いた私は、その場にしゃがみ込んでしまった。つい先日、彼女の住む京都を訪れ、「裕子さんの病状はどうなんだろう」と同行の知人と話したばかりだった。

彼女は私より1歳上の昭和21年生まれ。初めてお会いしたのは、30代になってからだが、彼女のことは20代前半のごく若い頃から知っていた。短歌に関心をもちながら学園闘争期の大学に身を置いていた私は、当時は短歌どころではなく、書店の店頭で、短歌

雑誌をめくり、大学3年で角川短歌賞を受賞し、〈今刈りし朝草のやうな匂ひして寄り来しときに乳房とがりあき〉といった瑞々しい作品を発表し続けていた彼女を遥かな憧れとして仰ぎ見ていた。
「女・たなか・女」と称するシンポジウムを企画し、自らパネリストを務めながら、各地を巡る。そんな行動を共にしたのは、彼女も私も30代半ばになってから。阿木津英さん、先に亡くなった永井陽子さんと、一括りにされ、「30代女性歌人」と呼ばれ、俵万智さん登場に至る今の女

性短歌隆盛の先駆けとなったといわれた。振り返れば、なつかしい日々のごとである。彼女の著書に『体あたり現代短歌』という評論集があるが、河野さんの歌も生き方も振るまいも、すべてが「体あたり」だったと今となつては感じる。言葉を変えれば、ストレートな激情の人であり、シンポジウム前日の深夜に電話がかかり「明日、何しゃべらんか教えて。私まだ、考え、まとまらんから」と長話をするような人でもあった。友人として、全面的に受容できるタイプではなかったが、〈胎児つむ囊となりきり眠るとき雨夜のめぐり海のごとしも〉と、身妊りを歌い、〈君を打ち子を打ち灼けるごとき掌よさんさんばらんとき眠る〉と、夫や子を

歌う彼女は、夫も子もない独り身の私にとつては、眩しすぎる対象であった。ことに学生時代に歌を通して知り合い、結婚した夫君、永田和宏さんの存在は、河野さんにとっては、合わせ鏡のよう一枚であるかのように大きかった。「私、歌つくれたら、まず永田にみせて、彼が〇印をつけたのを出すの」。

何と厳しい言葉……と思ったが、この夫婦は短歌あつての夫婦であり、歌人としての河野さんの生を存分に全うさせようと、永田さんも懸命なのだと思ひ直した。ここ何年かは、その言葉を体現するかのよう、夫婦、息子の淳さん、娘の紅さんを含めた歌人一家としての仕事を広げていた。

肉体は滅びても残した歌は滅びない。それをいちばんよく知っていたのは裕子さん本人であり、永田さん一家である。彼女は、死の直前まで口述筆記で歌をつくらせていたという。どんな歌を置いて、早々とこの世を去っていったのか。辞世を詠むのは少し怖い気がしないでもない。

河野さんが乳がん手術をし、その後、再発したと知ったとき、仕事で一緒になった永田さんに「裕子さんは、どう」と聞くと「死んだらダメだ。絶対死ぬな。死んだら忘れられるぞ」とつねに言っている」と彼は答えた。そのときは

裕子さん、やっと闘病から解放されましたね。ご冥福を祈ります。合掌。